

## 日本統治後期の台湾先住民社会における公共圏と親密圏の意味

— 「シロハンケチ」を手がかりに —

### The Emergence of Public and Intimate Spheres for Taiwanese Indigenous People

坪田(中西) 美貴 (京都大学大学院文学研究科グローバル COE 研究員)

#### 【ねらいと目的】

本研究は、日本統治下の台湾先住民特にタイヤル族における公共圏と親密権が、誰にとってどのような範囲でどのような意味を持つのかを、「シロハンケチ」という行為を手がかりに考察する。

「シロハンケチ」が疑いをかける行為である婚前交渉とは、本来ならば親密圏に属する事柄であるが、それが「露見」すると、個人的出来事は、「タイヤル公共圏」で扱うべき事柄として回収される。だがここで「タイヤル公共圏」が正統性をもつとすれば、その時統治者としての日本の正統性は、そこにどのような形で関与し、関係を形成するのだろうか。また、親密圏内の出来事が公共圏に回収されるとは、どのようなことなのか。

このような問い、すなわち二つの公共圏の絡み合い、そして親密圏と公共圏との関係性は、「シロハンケチ」という出来事を手がかりにすることで明らかになってくるだろう。それは統治という権力構造内における公共圏と親密圏の意味の問い直しを迫り、それらを成立させているものが何かを問う。したがってなされるべきことは、まず、異なる文化や社会が一つの空間に存在する時、公共圏は一体どのような範囲で、どのように構築されるのかを明らかにすること。そして、親密圏内のどのような性質をもつ事柄が、なぜ、どのようにして公共圏へと回収されてしまうのかを分析することである。その過程において、公共圏、親密圏といった圏の枠が、いかにゆらぎやすいものかということについても浮かび上がってくるだろう。

#### 【活動の記録】

調査年月日：2009年7月19日～7月24日

調査者：坪田＝中西 美貴

調査地：台湾、宜蘭県、台中県

調査目的：インタビュー

インタビュー調査と史料調査も行った。成果を2009年ジェンダー史学会で発表した。

## 【成果の概要】

シロハンケチという言い方は、シロハンケツ、狩猟判決、判決など様々な言われ方をしてきたことが2009年7月に行なったフィールド調査から明らかになった。しかしこの行為がすべてのタイヤルの村落で行なわれていたわけではなく、シロハンケチという言葉すら聞いたことがないという村落もあった。ただ、伝統的に狩猟によって何かの判断を占うという行為自体はどの村落にもあったことが、文献と史料とフィールド調査から明らかになった。このことから、シロハンケチという行為は日本統治下に日本人との接触によって、従来からあった狩猟による占いが変容したものとも見ることができる。

シロハンケチを行うガガという集団は、特に身体規範への関心が働く閉鎖的な親密圏である。女性にとっては、ガガの規範に従うことが、ガガ内での生存を可能にしていた。規範を守ることを要求する長老たちにとってガガは、タブーによって秩序を保つ1つの社会であった。よってそれは、生活を共にする親密圏であるとともに公共圏でもあった。

日本統治下という公領域下において、届出もせずにシロハンケツを行う公共圏が存在できるのは、それが黙認されているからであった。その時そこには、女性を挟んで、公領域と公共圏がシロハンケツを黙って行い、それを黙認するという、一種の「共犯」関係が成り立っている。このような関係を、現状を維持しようとする共通の関心とみなすならば、両者の間には「公共圏」と言いうる関係が成立する。だが親密圏としてのガガ、そして統治—ガガが作り出す「公共圏」とは、女性の意思を無視したところではじめて成り立つ関係性なのであった。

